

第2回 2025年 大阪・関西万博 政府出展事業検討会議 議事要旨

■日時：2021年12月2日（木）14:00～15:30

■参加者

池坊 専好氏、古賀 信行氏、コチュ・オヤ氏、佐藤 オオキ氏、塩瀬 隆之氏、鳥井 信吾氏、
廣安 ゆきみ氏（米良氏代理）、古谷 善博氏（千氏代理）

■議事要旨

●事務局より、資料3に基づいて、日本政府出展事業（日本館）基本計画骨子（案）について説明した後、有識者から意見を頂戴した。各有識者からの主な意見は以下の通り。

・基本計画骨子（案）は非常によくまとめられており目指すべき方向が分かりやすく提示されている。国際的相互理解の促進について、元々国際社会においてそれぞれの国が抱えている課題や状況がある中で、ここ数年は新型コロナウイルスによって生じた不公平感や社会的な状況によって生じた感情的な問題が加わって、かなり国際情勢や国際間の考え方に新たな課題が出て複雑化している。2025年の万博においては、相互に理解し尊重しあうことで良い世界を作っていくということをどう具現化していくかに期待したい。

・過去博でも若い世代のクリエイターやアーティストが生まれてきた。若い世代の登用については、様々な世代の人の融合の中で若い才能をエンカレッジするという形がよい。

・基本計画骨子（案）は今後の実装指針を示すものなので、その意味においては簡潔に文章化できているという印象を持った。ただ、テーマが「いのちと、いのちの、あいだに」という非常に抽象的な概念。文章の段階では良いが、具体的なコンテンツでテーマを表現する以上、参加者全員が理解しやすく、皆の心に残るようなものにすべきである。

・ドバイ博に行った人の反応を見ていると、「楽しさ」に焦点を置いた反応が多い。例えば、今はメタバースがホットトピックだが、アプリケーションを作って、他のパビリオンと繋がって、メタバースの体験をさせながら将来を経験させるということも、遊びつつ技術の要素があって良い。外国人、特にミレニアル世代は、日本＝テクノロジーという発想がある。将来の技術というホットトピックスも要素の1つとして入れたら良い。

・基本計画骨子（案）について、基本構想の内容を受け継ぎつつ、より具体化されている。

万博は世界で一番大きな博物館そのものだと思う。博物館は、世界的には紛争や国際的な課題をとらまえる場所としても認識されており、そういうものを一堂に会して知るといふ事で言うと、言葉だけではなく目に見える形で見せることが大事だと思う。

・今回の日本館は、最初から思い出してもらいやすいものを入れた方がいいのか、それとも結果的に思い出せるものをお土産として持ち帰ってもらい、そこから思い出ができるのがあるのか。最初からこれは忘れないでいてくれるというものを渡すより、後からじわりじわり効いてくるものがあるのではないかな。

・自分を光らすことで相手の光を消してしまうことがよくある。相手を光らせた上で、自分ももっと光るといふような形での各パビリオンの在り方がそれぞれの国や機関の人たちに共通認識としてしてもらえれば、居心地のいい万博になるのではないかな。

・万博が終わった後の利用を考える必要があると思う。それはなぜかといふと、やはり何ごとにも「起承転結」がある。開催期間中にのみ「起承転結」があるのではなく、記憶として微かでも残っていくうちは「結」はその先にある。

・デジタルとリアルの関係について、コロナ禍以降はデジタルの価値が見直されて、そのあと再び、やはりリアルでないと出来ないことがあると見直され、デジタルとリアルを行き来するようなここ数年だったと思う。万博はリアルイベントの最たるものなので、わざわざリアルに来てもらう価値、その工夫をどう考えるかが2025年においても非常に重要なポイント。1つ1つの展示を単体で見て面白いといふのではなく、他のパビリオンとの繋がりなど、万博というイベントを巡り歩くことそのものが楽しめる設計にするなどは考えられる。

・準備段階から人々に関われる仕組みを考えるべき。来た人全員でなく一部でも、事前から徐々に期待感を持って、日本館が出来上がっていく過程に関わることで、だからこそリアルで参加したいというモチベーションに繋がるのではないかな。

・華道や茶道は、花や茶とその周辺の価値を極限に高めるものと思う。結果的に思い出せるものをお土産として持って帰ってもらうといふお話があったが、その時には華道や茶道の世界を応用することで、付加価値の高いものが生まれるのではないかな。

・日本のアニメは世界でも認められている。展示をするうえでの表現も、アニメを応用できるのではないかな。